

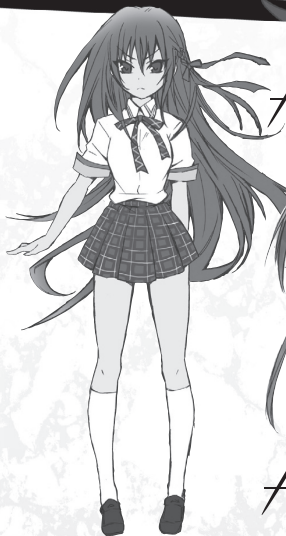
思春期なアダム7

kissing you

さかき傘
挿絵／天海雪乃

立ち読み版





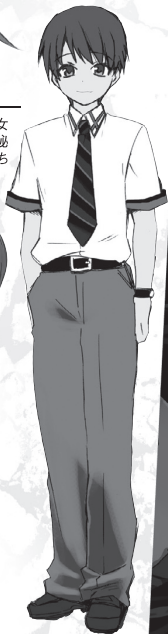
じゆうに
地遊尼エンジュ

睦月を護衛する天使少女。身の丈ほどもある大剣を操る。



ふじたむつき
藤田睦月

普通の少年だが、右目に女性を支配する“蛇眼”の力を秘めており、現在はエンジュたちと同居し、保護されている。



いべくさ
伊部草マキナ

秘密組織「FeTUS」の一員。同級生、睦月を監視するも彼へ惹かれていき…。





ミスA

『FeTUS』幹部の一人。中世以前から生きていたと思われる、年齢不詳の幼女。



里輪ルシア

蛇眼を狙う魔族の美少年。睦月に懐きすぎて、友人以上の関係に？



白原恋 ラグリエル・バラン

睦月のひとつ上の先輩。その正体は『FeTUS』の騎士、ミスBである。

リゼル・バラン

英国の名門バラン家の次期当主候補。しかし『FeTUS』を裏切り、黒崎家の軍門に下る。



勝江昂

睦月のクラスの担任教師だが、正体は『FeTUS』のエージェント・黒猫ことミスC。



地遊尼ミカ

睦月とエンジュ、二人の保護者となる大人っぽい美人の先輩天使。



九里空沙耶

睦月のクラスのムードメーカーの明るい少女。

加賀利炎呪

黒崎家によって創りだされた、エンジュとそっくりの顔をした少女。



STORY

世界のあらゆる女性を発情させる力「蛇眼」を右目に秘めた少年・睦月は、天使、魔族、そして人間側の秘密組織『FeTUS』に監視される生活を送っていた。普段は天使エンジュとミカに護衛される睦月。彼は魔族の美少年ルシアや、『FeTUS』の少女マキナとも心を通わせ、三勢力が争わずに済む方法を模索する…。——文化祭が近づき活気に満ちる学園に、復帰した

生徒会長・白原恋。かつての睦月の初恋の相手であり、『FeTUS』の騎士でもある彼女は、睦月に迫るマキナやルシアたちの不適切な関係に目を光らせる。そして、学園祭の準備に沸く喧騒の裏で、『FeTUS』と敵対する黒崎家に与した従妹・リゼルと遭遇し、敵対勢力の動きに一抹の不安を感じるのであった…。

これまでのあらすじ

「だって、久しぶりにエンジュと一緒にだなーって思っ
て」

ぐーっと伸びをしながら言う。

少し前まで睦月は、生徒会長の勅命を受けて、毎朝5時起きで学校に行き、文化祭の準備をしなければならなかった。

その命令がつい先日解かれたのだ。このボディガードさんと一緒に登校するのは久しぶりだった。

「そ、それが何よ。バカじゃない」

登下校が別だっただけで、一緒に住んでいるし、学校では教室も同じだ。1日で一緒にいる時間が12時間強から1時間ほど減っていただけに喜んでる少年に、エンジュは顔を赤くして口を尖らせる。

「ま、あのイタい女と顔合わせなくて済むから喜ぶ気持ちは分かるけど」

「イタい女って。白原センパイは別に」

「ハン、イチャもんつけてアンタの行動縛って、なにがしたいかも分かんないバカ女じゃない。ストーリーカーよストーリーカー」

キラってるなあ。苦笑する睦月。

こちらとしては、5時起きこそキツかったものの、生徒会長と一緒に文化祭準備は楽し

かったのだが……。

「本人のいないところで悪口とは、悪趣味だな、地遊尼エンジュ」

「うわあ！ し、白原センパイ」

ちようど丘の上にある学園への一本道にさしかかったところで、逆隣りにもう一人追いついてきた。

白原恋——いま絶対に会ってはいけない人物である。慌てる睦月。

逆にエンジュは苛立たしげに眉をひそめると、好戦的に笑い、

「あら、観察目的で相手の迷惑も考えず拘束する女って人間界じゃストーカーって言うんじゃないか」

「アレは藤田睦月の自堕落な面に対する教育であって拘束ではない。確かに私の都合で共同の業務にあたる形を取ったが、その点は彼も納得している」

現れた恋も、表情こそ変えないが好戦的だった。

「百歩譲って私が彼を拘束したとして、不快に思うなら直接私に言うことだな。私のいない場を見計らってあてこするなら貴様が浅ましい卑怯者なのに変わりはない」

「なんですって!!」

「なんだ!!」

「お、落ち着いて二人とも」

一触即発、睨みあう二人。

睦月は止めようとするのだが、こういうとき八方美人は損で、挟まれたまま無視される。

「よっす睦月。地遊尼もウツスー、……つと、会長」

「あつ、お、おはよう栄」

幸いにも友人が助けてくれた。追いついてきた幼なじみの供野栄がぼんと背を叩く。

エンジュはともかく、高嶺の花である生徒会長までいたのには驚いたのだろう。恐縮する栄だが、険悪な空気は流れた。

そのまま四人で学校へ。一人学年のちがう恋は途中で別れ、3人で教室に向かう。

「すっかり仲良くなったよなー会長と」

「う、うん。そうみたい」

「今度俺も紹介してくれよ、このTHE・いずれ世界の中心に立つ男である供野栄は、まずはTHE・学校の中心に立つべく来年は生徒会目指してんだ」

「栄ならコネなんてなくても入れるよ」

あまり会長の話を続けると、エンジュの顔がどんどん不機嫌になるから怖い。

仲良くなつた。というのは間違いない。

少し前まで手の届かない相手に思っていた白原恋は、最近明らかにあちらからコンタクトしてくる回数が増えた。

——新たな敵、黒崎家の先兵が睦月を狙っている。

彼女もまた睦月をボディガードしてくれているのだろう。ただ、天使の守護者であるエンジュと仲が悪いのが問題だ。FUSと天使の敵対関係は委細変化ないのだから。

睦月としてはどちらも邪険にしたいくないし、といってピリピリするのも困るし。できれば……、

「おっ、はは、今日も名人芸だな」

栄に言われ窓から外に目をやる。

校門が閉まる時間だった。時計びつたりに門が閉じられていき、

まさにギリギリの時間に伊部草マキナが通り過ぎる。

「相変わらずすげーなアイツ。最近じゃもう誤差1秒もないくらいだぜ」

「うん」

いつものことながら、まるで時計のように、機械のように正確な行動パターン。マキナは相変わらずで、毎日を機械のように変わらず過ごしている。

……できればエンジュや恋も、彼女のようにいつも通りでいてほしいのだが。

(言っても仕方ないか)

睦月はそのまま教室へ。

「おっはよーエンジュちゃん、睦月君たちも」

「おはよっ、睦月くん」

「おはよう九里空さん、ルシア君」

これまたいつも通りクラスメイトたちと挨拶をかわす。

元氣よく手を振ってくる沙耶や、飛びついてくるルシアの相手をしながら自分の席へ。

「ね、ね、睦月くん。今日ね、例のバンドの衣装チェックするんだけど」

「うん」

自然と女子は女子、男子は男子のグループに分かれた。

話はほとんど、もうすぐに迫っている文化祭のことだ。

エンジュはクラスを代表して演劇に。ルシアは縁があつて誘われたバンドのボーカルをする事になった。

お祭りが近いとあつて、クラスは朝からにぎわいがちだった。皮肉屋なエンジュでさえ

楽しみにしているようで、さっきまでのピリピリを忘れている。

蛇眼の発動。天地魔間の戦争。半年前から自分は大変な状況にあるのだが、忘れてしまいうくらい楽しい毎日。

ずっとこのまま変わらないでいられたら……と思った。

エンジュも、ルシアも、恋や他の F&TUS、天使、魔族とも何も変わらずに。

マキナみたいにもいつも通りでいてくれたら……。

「あっ、おはよう伊部草さん」

「おはよう」

校門を抜けてからびったり5分後に、マキナも教室にやってきた。

いつものように隣の席につき、いつものように荷物を置いて……。

「……」

「……? なに?」

けれど今日はひとつだけちがう。

いつもなら席に腰かけ、一言も発さず先生を待つのに。今日は座ろうとせず、隣の席の睦月に近づいてきた。

少年も、集まっていたルシア、栄。後ろの席のエンジュや沙耶もきよとんとなる。

いつもほとんど他人に関わりとうしない少女は、自然のことにように腰を折り曲げ、
「? どうしたの伊部草さ……」

——ちゅむ。

少年の一番デリケートな部分へ侵入した。

唇に吸いつく甘やかな柔感。一瞬なにをされたか分からず睦月は凍りつく。

「は!!」

「あ!!」

「えええええええ!!」

1秒置いて周りのみんなが飛び跳ねた。

「つぶああ! ななななに?! なに伊部草さん! なに!!」

さらに1秒遅れて、少年は計2秒間奪われた唇を振りほどく。

マキナは何も言わず、じーっとこちらを見てきた。

彼女の無口はいつものことだが、今日は状況がちがう。睦月は慌てるばかりで、

「……」

ほどかれた唇をまた近づけてくるマキナから逃げることもできない。

「藤田君……」



「あ……」

周りの視線を完全に無視して、

また唇同士がくつつく……。

「待てえええええええ」

—— ツツツ!!

直前にエンジュとルシアが止めた。



「はーっ、はーっ」

クラスのみんなには『マキナは貧血で倒れた』ということにして、エンジュとルシア、そして『偶然ぶつかられて唇があたってしまった』睦月が付き添い、教室を出た。

「あとで届けを出しておくように」

保健の先生がいい加減な人で助かった。とくに詮索されることなく、保健室で四人の時間を作る。

「なにやらかしてんのよッッ！」

瞬間的にエンジュが嘔みついた。

マキナはいつも通り感情を出さず、

「口づけを」

「分かっているわよ見てたから！　なんで急にキスなのよ！」

「……」

「黙ってんじやないわよ！　睦月！　アンタからも何か言って……」

わめきながらエンジュが睦月を呼ぶ。

「んむぶぶ……る、ルシアくんいまはそんな」

「上書きだよ、んっつ♡」

「そっちも何やってんだ——！」

睦月はルシアに絡みつかれていた。こっちは容赦なく聖炎つばさで弾き飛ばす。

怒るエンジュ、熱がるルシアはいつも通りとして——、

「い、伊部草さん。その、さっきのは一体」

マキナの様子が明らかにおかしい。いつも教室では無口なだけで常識人なのに。

「迷惑だった？」

「迷惑だってわけじゃ。ただ、あの……」

やはり様子のおかしいマキナ。

スパッツの中が自分で分かるくらい蒸れだしていた。

「クス♥」

そんな天使の反応と、それでも自分からは混ざりたいと言いつけ出せないプライドの高さを分かったうえで。ルシアはなおも睦月に甘えかかる。

「んあっ……、ちよ、る、ルシア君、なにを」

唇と同時に身体もくつつけ、寄りきるように近くのマットに座らせていく。

優しく押し倒され困惑する睦月は、いつの間にかワイシャツのボタンを外されていたことに気づいた。

アンダーは着ているとはいえ、首もとが開いて、ようやく自分がいま何をされかけているか悟る。けれどそのころには身体がぐったりして、

「だ、ダメだよルシア君、あの、キス、キスだけ……」

「ん〜？ そうだった？」

唇をつなげたまましていると、獲物睦月は力が入らない。それも承知で抵抗を奪いながら、魔少年はしゆるしゆる少年の着衣を奪っていった。

シャツを開き、アンダーをめくりあげる。

「あ……っ」

睦月もルシアほどではないが、男性的とは言えない体つきだ。思春期に入りかけの身体は筋肉の素養がなく女性的。お腹や胸はぜい肉こそなくてもどこか柔らかく、乳輪は可愛らしいピンク色だった。

ベルトを外してズボンも下ろすと、ようやく雄々しく勃起した男性的な部位が見えるが。腰からヒップへのラインも子供供して見た目には愛らしい。

「だめ。あの、ルシア君、ここじや……だめ」

巧みなキスに根負けした睦月は、それ以上を求めてくる淫魔の手つきに、か細い声でしか反発できなくなっている。

「ちよ、ちよつと、いい加減にしなさいよ」

助かることにこの場にはエンジュがあり、間に入ってくれるのだが。

「なんだよ、してることはキスだけだろ」

「う……」

「ふふつ、それにい」

口先では小悪魔には敵わない。加えて、

——ぐいっ！

「きやあつ」

手を引つ張られ、エンジユまでマットに転がされてしまった。

腕力では少女のほうが強いはずなのに。足腰に力が入っていないのを見抜かれている。

「約束は守るから邪魔すんなよ。……キスならいいんでしょ」

隣り合わせて寝かせた少女に見せつけるよう、睦月の首筋に顔を寄せるルシア。

ちゅむ、ちゅむ、口だけでなく首筋、胸、お腹と唇を這わせていく。

「ふあつ、あちよ、ルシアく……ん、んあ」

腹部に、あばらに、乳頭にまでキスが来る。寒気のようになくすぐったさに、睦月は四肢を強張らせた。

隣にエンジユが来たことで、気恥ずかしくてしようがないのだが。ルシアはとにかく抵抗力を削ぐのが上手すぎる。それに、

「ふふ、どうしてもって言うなら、お前が守れば？」

「え……あつ、こら」

エンジユの手を取り、少年の下肢へ導いた。

振り払おうとする少女だが、小悪魔の手とはけた違いに熱いものが触れて動けなくなる。

「わ……わ」

「ふふ、ボクがおかしなことしないよう守ってるよ。……理性が持つならね」

「守るって……、あの、……う」

マキナとルシアの唾液を吸って、すでにギンギンに熱化しているペニス。触れたエンジユは、魅入られたように指を絡めてしまった。

「え、エンジユ……んう、は、あ」

ただでさえ昂^{たかぶ}った身体。上半身には淫魔がキスの雨を降らせ、下半身では急所を天使が掴みしごいてくる。

抵抗できない。以上の快感がこみ上げて、睦月は横たえた身体をのたうたせた。

「ふふふ♥ 大人しくしててよ、キスするだけ」

時どき唇に戻りながら、上体のあらゆる箇所^{箇所}にキスしてくるルシア。

「……はあ、はあ」

エンジユもまた、その状況が作る異様に飲みこまれていた。

いつもなら、とくにルシアの言うことには無条件で否定から入るくらいなのに。操られたよう言われるまま、

——にゆに、にゆに。

「んあつ、あの、エンジユまで……ひう」

睦月の雄肉部に絡めた指を、優しくピストンさせてくる。

「っ、うっ、うあ……ああ」

ミカをはじめ、たくさんの女性と関係を結び。「大人」の性を充分に知っている少年だが、感度そのものは肉体同様「 」のものだ。肉柱は感じやすく、あやされるだけでイタズラの続く腹部を官能的にうねらせてしまう。

(あ……っ、睦月の、もつと大きく)

腫れがさらに血の気を増し、ペニスを肉の凶器へと変えていく。

手のひらに感じるオスが凶暴性を増し、エンジユは知らず知らず、二度目、生唾を飲んでいた。

さつきからずつと口の中がタルい。マキナとのそれを見たときから、睦月のペーゼは想像の中で、少女の口腔もまさぐり続けていた。くたくたになるまでキスを受けたように、舌は付け根から痺れ、内頬は熱く火照り、歯茎がすみずみまで疼く。

空想だけで頭にもかすみがかかっている。思考が定まらない。自分がいま何をしているかよく分からない。

この手の中にある、何度も虜にされたモノの感触以外は……。

「ああ……」

つるんとした亀頭から、大きく横に張り出したカリ首を撫でまわした。

少し皮のあまり気味な肉胴を握りしめれば、奥のほうに金属のような硬さがある。陰囊は皺を刻んで縮こまり、すでに射精の準備を済ませていた。

すぐにも使える。性器に、女を犯す道具になっている。

(だ……め。とける、あたし、あたしのなか……とけるう)

空想のペーゼで口腔がとろかさされたように。今度は下半身までが、反応をはじめてしまっていた。

下腹部の……子宮だろうか？ おへその奥のほうがじりりと火をつけたように熱くなっている。

この逞しいもので突かれ、叩かれる感じを思い出したのか。バウンドしているような気がした。つながる膣道がグネグネと収縮を起こすせいで、

——じわあ。

(あう……あ、濡れて、垂れてきた……あ)

愛用のスパッツの奥で、ショーツに生温かさが広がっていく。

前にしたのは一週間ほど前。保健室で。

もちろんいつもの睦月らしく、優しく丁寧に、それでいて情熱的に貫かれた。腰を射貫く硬くて熱い挿入感。汗まみれで絡む肌。感覚は頭にも、身体にも焼きついている。

着衣を蹴飛ばして、お尻の穴までさらして肉交する記憶が、快感が、次から次にあふれてきてしまう。

(い、いいよね……、一週間も我慢したもん)

毎晩ミカとこそそしているのを、気づいていても無視してきた。

本当は毎日味わいたいののに、毎晩ベッドで、シーツがべとつくくらい汗まみれになって我慢したのだ。今日くらい……という気持ちに火がつく。

「え、エンジュ、ダメだよこんなところ……んあ、あああそこ、お」

自然とペニスをさする手つきも、いつも膣肉がそうしているよう、ねっちり絡むような淫猥さになっていた。

亀頭から根元まで、カリの段差も含めてすっぽり指で包む。

身体の小さなエンジュは手のひらも小学生サイズで、全体を包むことはできないけれど。愛しげに愛しげに揉みまわした。

それは同時に少女の中で、空想の興奮を加速させる。

(んあ、ここ、この大きくなつてるところがハマると……♡)

長大なカリ首が膣ヒダをめくる、あの痛いくらいの快感がフラッシュバックした。わなわなつと腰を突き上げるエンジュ。



「ふふ、ほんとエッチな天使だな」

誘いこんだ天敵が、思いがけず役に立つことに苦笑しながら、ルシアは逆方向から少年の横に寝そべる。

「お前は大キライだけど、そういうとこだけは悪くないよ。……んっ♥」

再度睦月の唇をすくい取った。

小悪魔に舌を吸われ、乳頭からわきからお腹から——上体のあらゆる箇所をくすぐられながら。天使の少女にはねうちり性具を押し込まれる。くりくりと乳首をコネられると、ペニスもエンジュの指を弾きそうなくらい跳ねた。

「はあ……ん、睦月、もうだめ、もう、あたし……」

「……うん」

理性がトロけてしまったエンジュが、指先にある拡張感に先に溺れる。

睦月もまた応じて少女の手を引いた。小さな身体はおぼつかない様子で持ち上がり、少年の身体をまたぐ。

まだショーツも脱いでいない。前戯と呼べる前戯もしていないのに、スカートの中がじつとり熱しているのが、またがれたペニスの穂先で分かった。

スパッツをくるくる丸めてひざまで下ろし、下着はクロッチだけをずらして、腰を下ろ

していくエンジュ。

「ちえ」

自分をはじめたのに。先を越されたルシアが不服そうにする中、

——ニチ。

「いう……っ、ひ、……いんん……っ」

柔らかくトロけた女体の裂け目へと、亀頭がめり込んだ。

「くあああああ、ひっ、太……お、睦月、んああもつと大き……くう」

女性を感じた瞬間、少年のものは、生理反応のように膨幅を増す。

濡れとけた花びらが内部から押し広げられ、少女の身体が弓なりにそりかえった。肉の衝撃は痛いほどだが、同時に上になったエンジュからこらえる力を奪う。

凶暴な切っ先に睨まれた蜜部はそのまま——、

——ぬぶ……う、ぬぬぬ……っ。

「っひあああああう……っ！ ううう」

「あ、あ……エンジュ、んく」

野太い切っ先が一気になだれこんだ。

硬いくらいの肉がずしんと子宮口を押し、少女が目を見開く。同時に蜜をまぶしただけ

で処女地のように新鮮な粘膜でペニスをこすられ、少年も声をあげた。

「ふうんだ、横入りしやがって」

挿入だけでビクつく二人に、ルシアが口を尖らせる。

少年少女の相性のよさは、見ている側にこそよく分かった。さつきまでこの狂騒の主役だった淫魔のことすら忘れたように、お互いの肉に、感触に、結合したという事実になんて夢中になっている。

それが面白くない。けれどもいまさら結合をほどこうとすれば、完全に自分は「邪魔者」に見られるだろう。口をへの字にして、

「……♥」

すぐまたにんまりと相好を崩した。

茶目つ気たつぷりな、男も女も強制的に恋に落としてしまう魔性の笑みを。

「睦月くん、こいつフラフラしてるけど、危ないんじゃない？」

「え……？ あ、うん、エンジュ大丈夫……？」

連結直後の脳芯の震えに酔っていた睦月は、ふと正気に戻される。

エンジュの upper body がおぼつかなくなっていた。少女は基本的に受け身な性格なので、する

ときは正常位が7割、他も角度を変えての挿入ばかり。上になるのに慣れていないのだ。倒れそうになっている。

意識のふわふわした中で騎乗位はハードルが高いらしい。またがった状態で身体が安定しなくなっていた。

「ご、ごめんごめん」

「あう……♡」

睦月は慌てて身体を起こし、小さな身体を抱きしめてあげた。理性のぼやけたエンジュは赤ちゃんのように嬉しそうに笑い、引つき返してくる。理性のぼやけたエンジュは赤ちゃんのように嬉しそうに笑い、引つき返してくる。

結合は解かないまま、ふにと柔らかい肌を抱きしめる。

さつきまでより一体感が強くなって、二人にはこれでもちょうどよかった。

「ふふ♡ ほら睦月くん、ちゃんと抱っこしててあげなよ」

そして小悪魔にとってはもつと都合がいい。

狙いましたように少年の後ろに回り、背中にぺたっと引ついたら。

キスのしにくい位置に……不思議に思う睦月だが。

「んわっ」

次の瞬間に理由が分かった。

先ほどは手のひらから感じた男の遣伝子が、女の中に組み込まれた因子に火をつけている。この男に逆らってはいけない。朦朧とした頭がそう判断している。

「クク、わしのちんぽは美味いか？ ずいぶん気に入ったようだが」

「んふう、ふうう♡」

それに今まで経験したこともない、巨大でこぶ入りの男根を喉に受けていると、いつの間にか口淫奉仕にのめりこんでいる自分がいた。

苦しくて仕方ないほどの圧迫感が顎を、喉を突いてくる。女の本能なのか、その衝撃がツンと鋭く子宮を刺激するのだ。

被虐の色で目じりを染めた女の顔に、慶吾は満足げに笑い、ショーツに添えた指を内部へと差しこむ。

「うっ、ううううん♡ むふう、ぶあ……あああん♡」

「もうヌルヌルだ。わしのが欲しくて奥から奥から汁を滴らせておるわ」

「く……う」

ペニスを埋め込まれた口端から淫楽の喘ぎをにじませながら、女は悔しそうに眉根を寄せる。

図星だった。口腔を満たすオスに身体が、子宮が、メスの反応をやめてくれない。より

いい挿入感を提供できるよう膣壁はゆるみ、濡れ。早く入れてとねだるようにウネり続けている。

(……わ、私は、私は……)

涙越しの視界に天井が、教室が映る。

この教卓は、生まれながらの戦士シュバルツにとって人生の転機となる場所だった。

四月にはここに立って、勝江昂と言う名の教師になり。六月にはこの場所で愛されて、藤田睦月の恋人になった。

けれど口を満たす巨根に無理やり記憶を呼び覚まされてしまう。

恋人になる前、先生になる前、戦士になる前。生まれたとき、すでに自分は、この男根の奴隷だったのだと。

——じゅぽっ。

男が腰を引き、長大なペニスがかから抜かれる。

同時にショーツの内部へ忍ばせた指も抜き取った。門の形のクレバスは、指を追いかけたのか外側にはみ出して、にゅぽつと卑猥な音を立てる。

「はあ……はあ……」

あれだけ嫌がった黒崎慶吾の接触。終わった途端にシュバルツは、あまりの切なさにも
た新しく涙で目じりを濡らす。

男はもう待つだけだった。女が次に何をするか、予測できているのだ。

娘を躡ける父親のように——待っているだけで、

「入れて……ください」

シュバルツは自分から屈服の言葉を絞りだす。

「ください、ああ、もう我慢できないんです。このいやしい身体にお情けをください」

「……クク」

「……お父さま」

強制されるより先に、自分から認めてしまう。

この男は自分にとって絶対の力を持つ、父親なのだ。

「よくできたな、エリザベート」

「あ……♡」

先ほど言った通り、男は手を伸ばして、寝ころんだままの女の髪に触れた。

頭を撫でられる。

わず痒いような感触の中、シュバルツは目を細めてそれを受け止めた。父に褒められた

娘そのものの顔で。

至福で満たされた頭の中には、もうFETUSも、藤田睦月のことも残ってはいなかった。

★

★

寝そべった身体を起こした黒猫は、そのまま床に手をつけてみせる。

タイトスカートを自分でめくり、ショーツを下ろす。もぎたての白桃のように真ん丸でジューシーな臀丘を男のほうへ差し出した。

大切な性器からお尻の穴まではつくり開いてさらけ出す。猫の野性が取らせた、完全な服従のポーズ。

「こんなに濡らしおって。童貞でも迷わずまぐわえそうな淫乱ぶりだな」

「ああ……すいませんお父さま」

「よいよい、言っただろう。どれだけ淫乱でも、お前はわしの娘だ」

男はもったいぶって、ゆるゆるとその尻をさすってみせた。

「ああん♡ お父さま、意地悪しないで」

それだけでも内太ももに新しいエキスを垂らすほど恍惚としながら、シユバルツはさら

に浅ましく腰をクネつかせて催促した。

「どうかエリザベートに、お父さまの寵愛をお願いします」

アヌスまでひくつかせながら腰を下げる。肉刀に触られ土手肉がせりあがった。

Fetus・Witches ミスC、シュバルツ・カツツエが、黒崎の娘エリザベートへと生まれ変わった。それをしつかり見定めてから、男は亀頭を繰り出す。

——ヌル、ク、クククク……!

「あつ、あ、あああ——つ」

「ほう、濡れっぷりはスケベなのに、ユルいわけではないのだな。窮屈なくらいだ」

「あんつ、あつ、お父さまの……大きすぎるから、ひあつ♡ はあああつ」

レイプに変わりにないほど手加減せず、巨大なものをズブズブ埋め込ませていく。

女肉の感触は温かく、ヌラヌラした潤いとその締めつけが絶妙だ。ヒダは舐めるようにひっかくように砲身をなぞる。男なら誰でも結合を急ぐのは無理もない。

まして悲鳴をあげるほどの乱暴さを受けても、シュバルツの顔に苦痛の色はないのだから。

「真珠入りの味はどうだ。強烈だろう、ん？」

ヒダをひっかく粒子は肉だけでなく、人工物まで加わっていて。男の太さをさらなる凶

器に変えていた。

「…………う、ううう♡」

それでもやはり拒む気配はない。

戦士ゆえの痛みへの耐性でなく、単純にその衝撃をオブラートするものがあつた。肉の衝撃をやわらげる、肌の、いや——、

「フフ、真珠よりもわしの細胞のほうがキいておるようだな」

「ああああーっ、はああ、お父さまが、お父さまが入って…………くるう♡」

「ククク、手のひらひとつであのありさまだ。貫かれてはたまらんか」

差し出したハート形の臀部に深々収まる巨大な異物に、女は全身をゆすつて悶えた。ただでさえ長身なのに足を伸ばした後背位なので、その動きはいちいちダイナミックで扇情的だ。ブラウス越しの胸のふくらみも円をつくるようたぶついている。

「よおく味わうがよい、お前の膣はわしのを。わしの遺伝子を迎えるために生まれ、発育し、成長してきたのだ。ほれほれ入っただけでたまらんだろう」

「うああ、あつ、あああ——っ、すご…………うああああ」

言われる通り、これまで味わった性交とはまるでちがう反応を、シユバルツ本人より蜜部がひとりで起こしている。

(こんな……あ、ああ♡　　さすがすぎる。私、変わる、かわってしま……あ、あ♡)
頭の中が真っ白になる。

手の二オイを嗅がされた。触られた。口に突っ込まれた。これまでの前戯でも充分に女の思考を揺るがしていた魔の本能は、局部に差しこまれ。子宮に、女の中枢にドッキングを許したことで、最終段階に入りつつあった。

「スケベな壺が悦んどるわ。ほれ、ほれ」

「うあああん、ああああ、だめ、そんなに動かしちゃ……あうらんお父さまああ♡」

巨根の威力を誇るようにぐいぐい動かして、ねっとりトロけた女体をあえて雑にほじくりまわす。

そうすることで黒猫の本能に、自分の存在を植えつけるように……。

(……ううん、ちがう)

切れ長の目のふちを細めて、その蹂躪と呼ぶのが近い交合を受け止めるシユバルツ。

(思い……出してく)

植えつける、ではない。変わるでもない。

(私がこの方の。お父さまのものだったこと)

「おお、もつと締まってきたぞ」

(思いだしてくううう♡)

崩落するようにヒダヒダがあとからあとからペニスに吸いつく。女肉の名器ぶりに、慶吾も舌を巻く。

「ああああん♡」

激しい直線運動に合わせ、たくみに切っ先を右へ左へよじらせる。

すると柔膺はかきまわされる動きに反抗するよう、さらに切っ先へ食いついた。攻めれば攻めるほど甘美に反応するのがたまらないらしい。男の目の色も野獣じみていく。

「どうだエリザベート、ん？ たまらんのだろう」

「は、はい、あああつん♡ お父さま……ああ、こんな、にいい♡」

シュバルツの反応はもはや、父に甘える娘のようだった。黒髪をなびかせて、肩ごしに男を見上げるまなざしは。女性美そのものの濃厚な官能と同時にどこか幼い。

もちろん肉の仕草は大人のそれである。朱色に火照った背筋から、くびれきつた腰にかけて、たまらない感じでよじれていた。白人特有の艶深いミルク色をしたヒップが派手にうねる様は迫力抜群で、頼りなげにひくひくする丸見えのアナルとのギャップがまた男の獣性をおおる。

「あああ、やんつ、やあん♡ お父さま、もう、いく、あああもういくう」

それでも目の色と、そしてあふれる声音は、甘えきっていた。

「クク、そうかそうか」

女体側が派手にこすりつけてくれるので、抜き差しは任せて、ずつぷりと丸みの中間に刀を埋め込みきる慶吾。

かわりに背中から手を回して、下向きにたぶたぶ跳ねるバストをわしづかみにした。

「きやうううんっ」

ブラウス越しの双乳をいきなり掴まれ、子宮への刺激でぴんぴんに充血した先っちょを絞られる。女は声をひっくり返して驚く。

「ここもよく育っておるではないか。フフ、そらそらつまんでやると奥のほうのシメっぷりがまた顕著になるなあ、淫乱娘が」

「あつ、あん、ごめんなさい。淫乱でごめんなさいお父さま。あはあああでも、でも気持ちいいのお♡」

腰は大人しくしたといっても、真珠入りの野太さに変わりはない。締めつけた膣が逆に打たれているようにゴリゴリと刺激され、女を攻める。

「ひうううう」

グラマーな裸身は男に抱かれたままでも関係なく激しくうねった。

ぬるぬると膻壁をこねくられているだけでも、細胞が、遺伝子が、忘れていた主人に出会えた悦びに騒ぐ。

加えて胸乳をいじくられていると、とうとう直接的な肉の快感までが理性を決壊させはじめた。

「はああ、ああああ——っ♡」

シュバルツは凜々しい眉をきつく折り曲げ、涙に濡れた長いまつげまで細かく震わせる。荒々しい巨杖の一撃が、真珠のひとこすりが、膻肉に刻まれた甘く優しい快感を忘れさせていく。塗りつぶしていく。

いまや彼女の中に、その甘い快感をくれた少年。藤田睦月の名前はなかった。

「よしよし、わしもそろそろだ。お前の大好きなわしの細胞を、子宮にとっぷり流しこんでやるからな。一緒にいくんだぞ」

「う、ううう……はい」

口には出さないながら、女体の素晴らしさに打たれ慶吾も絶頂を告げた。

押し寄せる快感の波の中、打ち込まれた膻内の杖が小刻みに痙攣しているのが分かる。男の快楽の証に、シュバルツは紅唇を開き、甘く喘いだ。

「ください……お父さま。お父さまの精を、エリザベートに注いでください」

長身をそらせ、長い足を伸ばして、腰を男の砲口へと押しつける。

いまから出されるものが何かは分かっている。あの少し嗅がされただけで自分の価値観を変えたニオイ。あれの原液。男の遺伝子そのもの。

そんなものを身体に、女性器の深層に入れられたら。染み込まされたら。着床させられたら。きつともう二度と自分は戻れなくなる。このニオイを持つ相手に逆らえた自分に。FETUSとして天使や悪魔と戦い、睦月とともにいた自分に。

いまなら、いま逃げ出せば戻れるかもしれない。少なくともこのニオイの追いつかない場所ではいつもの自分に。FETUSの「ミスC」。

けれど女はそれを放棄した。

「あああ出して、中にいっぱいかけてっ」

限界まで尻肉を男に差し出し、一番受け入れやすい角度を提供して。

「く……っ！」

「ふあ……♡」

——ビュルルルルルルルルウウ——っ！ ビュククッ、ビュクル——っ！

「うああああああああああんいくウウウウうう——っ♡♡♡」

狂おしく疼く子宮へと、真っ白な刻印が流しこまれた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一・エロランベ&エロミック満載!!



2次元 ドリームマガジン 2D DREAM MAGAZINE



魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

大人気PCゲームのコミック多数連載!



コミック UNREAL アンリアル

ヒロイン ピンチDX

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。